

복합사의 역사적 변천에 관한 연구*

안 지 영**

(e-mail : ajy@kunsan.ac.kr)

< 목 차 >

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 1. 들어가며 | |
| 2. 결과 및 고찰 | 2.2. 經驗·回想·習慣을 나타내는 複合辭의 變遷 樣相 |
| 2.1. 經驗·回想·習慣을 나타내는 複合辭의 意味·用法 樣相 | 3. 나가며 |

キーワード：近代語法(Japanese modern grammar), 複合辭(Japanese compound particle), 變遷(historical change), 初出(first attestation), 經驗·回想·習慣(Experience, Recollections, Customs),

1. 들어가며

본 연구는 일본어 복합사의 역사적 변천 과정을 규명하고자 하는 것으로, 본고에서는 經驗·回想·習慣을 나타내는 複合辭 「-ことがある」와 이와 관련된 변형 형태를 중심으로 그 초출과 역사적 변천의 전체상을 명확히 밝히고자 한다. 나아가 역사적 변화 과정의 고찰과 함께 현대 일본어 용법과의 비교 분석을 통해 「-ことがある」의 복합사적 의미에 관하여 제시하고자 한다.

복합사란 몇 개의 단어가 복합하여 하나의 통일된 형태로 辭적인 의미를 담당하는 것을 말한다.¹⁾ 이상과 같은 복합사는 형태 및 의미에 따라 다음과 같이 분류 가능하며, 형태에 따라서는 이하와 같이 3가지 종류로 분류되고 있다.

* 이 논문은 2018학년도 군산대학교 신입교수 연구비 지원에 의하여 연구되었음.

** 군산대학교, 조교수, 일본어학 및 일본어교육

1) 松木正恵(1990)『複合辭の認定基準·尺度設定の試み』『早稲田大学日本語教育センター紀要』2, 早稲田大学日本語研究教育センター, p.27.

- 제1종 복합사 본래 「辭」인 조사·조동사가 2개 이상 복합하여 만들어진 복합사
- 제2종 복합사 본래 「詞」인 명사 중 실질적 의미가 약해진 형식 명사를 중심으로 복합된 복합사
- 제3종 복합사 본래 「詞」인 동사·형용사·형용동사와 같은 용언 중 실질적 의미가 약해진 형식용언을 중심으로 복합된 복합사

형태적 분류를 시도한 마쓰키 마사에(松木正恵)는 복합사를 더 나아가 의미별로 분류하여 크게 조사성 복합사(助詞性複合辭)와 조동사성 복합사(助動詞性複合辭)²⁾로 제시하였다.

<그림 1> 조사성 복합사 및 조동사성 복합사

助詞性複合辭		助動詞性複合辭	
格助詞性複合辭	資格・立場・場面	として, をもって, にとって, からすると, からすれば, からして, からいうと, からいえば, からいって, からみると, からみれば, からみて, からみたら	かぎり(は), ことには, ては, とすると, とすれば, としたら, (よ)うものなら, (よ)うことなら, ものなら
	対象・関連	についで, につき, に関して, に対して(て), をめぐって, をめぐり, にかけて(は・も), にかけて, にかけても, につけて(て)	では, とすると, とすれば, としたら, てみると, てみれば, てみたら
	仕手・仲介・手段・根拠・原因	によって, により, によると, によれば, をもって, でもって, を通して, を通じて, にして, につき	からには, からは, 以上(は), うえは, かぎり(は), だけに, だけあって, ばかりに, もので, ものだから, ものを, ために(に), おかげで, せいか, に従い, に従って, につれて(て)
	時・場所・状況	において, にあって, にあたって, に際して(て), につけて(て), にして	仮定 仮定 逆接 条件
	起点・終点・範圍	からして, をはじめ, にかけて, を通じて, にわたって	仮定 条件 対比
係助詞性複合辭	基準・境界	をもって, でもって 割合 についで, につき, に対して	平接關係 反復
	対応	によって(は), により, によつたら, によると, によらず 同格 との, という, といった, ところの	並立 添加 うえ(に), ばかりか, どころか
係助詞性複合辭	定義	とは, というのは	並接關係 反復
	主題化	とは, というのは, といえは, というと, といったら, とくると, ときたら, となると, となれば, になると, となつては, に際ら, に際つては, かといえは, かというと, としては, に見ては, に見れば, としても, にしても, にしたって, にしろ, としては, といつても, といえども, には, におかれましては	並接關係 反復
	強調	という, といった, といつて, として, にしても, にして, ことに(は), ことは, とばかり(に), んばかり	並接關係 反復
副助詞性複合辭	限定・非限定	ならでは, によらず, を問わず	並接關係 反復
	追加	ばかりか, どころか 除外 をよそに	並接關係 反復
接統	不適合	に(も)なく, ながらに 不明確 と(も)なく, とやら	並接關係 反復
	同時性	や否や, が早いか, そばから, (か)と思うと, (か)と思えば, (か)と思ったら, (か)と(思う)間もなく, (か)とみると, (か)とみれば	並接關係 反復
接統	時間的關係	うま(で), すま(に), あげく(に), ところ(が), まま(で), なり(で)	並接關係 反復
	相関	に従い, に従って, につれて(て)	並接關係 反復

2) 앞의 논문, 松木正恵(1990), pp.46-49.

助動詞性複合辞		
禁 止		てはいけない, てはならない, ことはいけない, ことはならない, てはだめ(だ), たらだめ(だ), べからず, ものではない
義務・上 ・必然・当然・必要 ・当然・当然・肯定 ・主観	義務・当然・当然・必要・主張	なければならぬ, なくてはならない, おぼならぬ, なければいけない, なくてはいけない, なければだめ(だ), なくてはだめ(だ), ざるを得ない, よりほか(は)ない, もの(だ), わけ(だ), のだ, はず(だ), こと(だ), ことになる, にきまっている
	否定形による当然等・当命等の否定・不必要	ものではない, わけではない, わけにはいかない, わけがない, はずがない, ことはない, て(は)ならない, てはいけない, べくもない, どころではない, とは限らない, には及ばない, までもない
可 能・不 可 能		ことができる, ことができない, こともならない, て(は)いられない, わけにはいかない
許 容・許 可		て(も)いい, たっていい, て(も)かまわない, たってかまわない, て(も)さしつかえない, て(も)けっこうだ, ともよい
意志・願意志	意志・決定	(よう)とする, んとする, まいとする, ことにする, ようにする, つもり(だ), てみせる
	自然成立・自発・強制・肯定的意向の強調	ことになる, ようになる, に至る, てならない, てたまらない, て仕方がない, て仕舞がない, ていけな, すに(は)おかない, ないではおかない, すに(は)いられない, ないではいられない, ざるを得ない
推 量・推 測・推 定		かもしれない, かもわからない, に違いない, に相違ない, にきまっている, はず(だ), ところ(だ), のだろう, ことだろう
適 当・願 望・提 案・勸 誘・勸 告		ばいい, といいい, がいい, ほうがいい, たらどう, てはどう, (よ)うではない, てほしい, (たい)もの(だ)
要 求・依 頼		てくれ(ないか), てもらえないか, てくださいませんか, ていただけませんか, てください, てほしい, てもらいたい, ていただきたい, てちょうだい
限 定		(より)ほか(は)ない, より(ほか)に仕方がない, ほか仕方がない, にはほかならない, まだ, までのこと(だ)
程 度		に過ぎない, に足りない, ても仕方がない, ても仕舞がない, (と)いったらない, 限り(だ), だけのことはある
経 験・回 想・習 慣		ことがある, もの(だ), にきまっていた, ことにしている, ようにしている, ことになっている

伝 聞	とのことだ, という(ことだ)
行 為 の 授 受	てやる, てあげる, てさしあげる, てくれる, てくださる, てもらう, ていただく
ア ス ペ ク ト	ている, ておる, ていらっしゃる, ておく, てある, てしまう, すに(は)いる, すにおる, すにおく, すにしまう, ていく, てくる, て出る, つづある, 一方だ, んばかり, たばかり, (よ)うとすること, (する)ところ, ているところ, ていたところ, たところ

* ()は, ()内の要素を付加しなくても可能なことを示す.

또한 이를 보다 세부 분류하여 조사성 복합사의 경우에는 격조사성 복합사(格助詞性複合辞), 계조사성 복합사(係助詞性複合辞), 부조사성 복합사(副助詞性複合辞), 접속사성 복합사(接統助詞性複合辞), 병렬조사성 복합사(並列助詞性複合辞), 종조사성 복합사(終助詞性複合辞)로 나누어 제시하고 있다. 이 분류에 따르면, 본고에서 다루고자 하는 복합사 「-ことがある」는 제2종 복합사로 조동사성 복합사에 해당한다.

현재 복합사 「-ことがある」에 관련된 선행연구는 복합사적 관점이 아니라 현대 일본어의 의미·용법에 한정된 연구가 대부분이다. 이에 본고에서는 이상과 같은 다양한 복합사 속에서, 개별 복합사인 「-ことがある」와 이에 관련 표현의 변천과정에 초점을 두어 연구를 진행하고자 한다. 또한 이러한 표현들이 어떠한 프로세스를 통해 성립되어 변화해 가는지에 주목하여 복합사적 특징을 규명할 것이다. 본 연구는 공시적 관점에서 연구가 주로 이루어지고 있는 현 상황에서 「-ことがある」의 사적 변천에 주목하여 복합사로서의 의미매김을 한다는 점에서 의의가 있다.

2. 결과 및 고찰

여기에서는 經驗·回想·習慣을 나타내는 「-ことがある」에 관한 기술을 정리·분석한 후, 고전 텍스트에서 추출한 데이터³⁾를 통해 「-ことがある」의 초출과 관련 표현들의 변천과정과 전체상에 주목하여 정리하고자 한다. 또한 통시적 관점에서의 분석만이 아니라, 현대 일본어 표현과의 비교·고찰을 통해 복합사로서의 「-ことがある」가 가지는 의미를 제시한다.

2.1. 經驗·回想·習慣을 나타내는 複合辭의 意味·用法 様相

복합사 「-ことがある」에 대한 기술은 크게 사전류에 단편적으로 기술되어 있는 것과 개별 연구 속에서 의미 용법이 기술되어 있는 것으로 나눌 수 있다. 우선 일본 사전류의 기술을 정리해서 표로 제시하면 다음과 같다.

<표 1> 일본 사전류의 「-ことがある」의 기술

	기술 내용
三省堂 大辞林 第三版 ⁴⁾	① (「…たことがある」の形で) …を経験したことがある。 「中国へ行ったーる」 ② 場合を表す。「夏でも高山では蝶を見るーる」
デジタル 大辞泉 ⁵⁾	(「…ことがある」などの形で) 経験。「アメリカなら行ったーがある」
ベネッセ 表現読解 国語辞典 ⁶⁾	[連語] ① (「…ことがある(ない)」の形) …の場合がある(ない)。 「たまに会って離すことがある」「故障することはない」 ② (「…ことがある(ない)」の形) …の経験がある(ない)。 「学生時代に自転車旅行をしたことがある」「うまくできたことがない」
	場合、経験、必要などの意。特に、近代では、この形による表現の幅が狭くなっ

3) 본고에서는 小学館 『新編日本古典文学全集』의 고전텍스트를 대상으로 하여 복합사 「-ことがある」 및 이와 관련된 표현을 추출, 그 양상을 검토하기로 한다.

<p>日本 国語 大辞典7)</p>	<p>て、一定の種類と一定の表現意図が結び付くようになってきている。たとえば、「…することもある(場合)」「…したことがある(ない)(経験)」「…することはない(必要)」「…することになっている(習慣)」「…するとのこと(伝聞)」「…することだ(それが最上である)」など。</p> <p>* 嵯峨本方丈記(1212)「淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久敷くとどまる事なし」</p> <p>* 滑稽本・浮世風呂(1809-13)前・上「さらば相伴しませう。こなたもまいれと半分づつ食(くふ)との事だ」</p> <p>* 通俗古今奇観(1814)五「那の不真不仮不了不絶の勾当(コト)ではなし」</p> <p>* 開化のはなし(1879)〈辻弘想〉初・二回「近日の御政事は、私共の青年間(わかいとき)には見た的(コト)も聞た的(コト)も無い事(コト)ばかり」</p>
<p>日本語 文型 辞典8)</p>	<p>【ことがある】</p> <p>1. V-ことがある/ない</p> <p>(1)A:京都へ行ったことがありますか。 B:いいえ、まだないんです。</p> <p>(2)ああ、その本なら子供の頃読んだことがあります。</p> <p>(3)そんな話は聞いたこともないよ。</p> <p>(4)高橋さんにはこれまでに2度お会いしたことがあります。</p> <p>(5)高橋さんにはまだお会いしたことがありませんが、お噂はよく聞いています。</p> <p>(6)このあたりは過去に官界か洪水に見舞われたことがある。</p> <p>ある出来事を経験したかしないかを述べるのに用いる。主として動詞が用いられるが、次のように「名詞+だった」という形が用いられることもある。</p> <p>(例)あのホテルはできるだけ早く予約し法がいいよ。3ヶ月前に電話したのに満員だったことがあるんだ。</p> <p>また。「-Vなかったことがある」という形で、「…しなかった」という経験を述べる場合もある。</p> <p>(例)財布を拾ったのに警察に届けなかったことがある。</p> <p>2. V-る/V-ないことがある</p> <p>(1)子供たちは仲がいいのですが、たまに喧嘩をすることがあります。</p> <p>(2)これだけ練習していても、時として失敗することがある。</p> <p>(3)天気の良い日に子供と散歩することがあるぐらいで、ふだんはあまり運動しませ</p>

	<p>ん。</p> <p>(4)A:最近、外で食事することはありますか。</p> <p>B:最近はあまりないですねえ。</p> <p>(5)長雨が續くと、害虫の被害をうけることがある。</p> <p>(6)彼は仕事が忙しくて、食事の時間をとれないこともあるそうだ。</p> <p>(7)乾期にはいと 2 ヶ月以上も雨が降らないことがある。</p> <p>ときどき、あるいはたまに何かの出来事が生じることを表す。頻度の多い出来事の場合には使えない。</p> <p>(誤)このあたりはよく事故が起こることがある。</p> <p>(正)このあたりはよく事故が起こる。</p>
<p>日本語 表現 文型⁹⁾</p>	<p>活用・完了の助動詞「た」を常に受けて、経験を表す。「ことはある」「こともある」「ことのある」「ことある」等の変化形、およびそれぞれについての過去形・推量形・丁寧体等、様々な携帯を有する。</p> <p>○時には行きずりの車屋なんぞを連れて来て、「おあがり」なんていった<u>ことがあ</u>つて。</p> <p>○「お前は去年の六月ごろ、平清から駕籠で帰った<u>ことがあ</u>ろうかな。」</p> <p>○今より六七年前、私はある地方に英語と数学の教師をしていた<u>ことが</u>ございます。</p> <p>○「イギリスはどうなってしまうのだろう」というイギリス人の医者<u>の</u>嘆きを聞いた<u>ことはあ</u>りますが…」</p> <p>○「あたし、父と母が小学校しか出てない小商人であることを、恨めしく思っ<u>た</u>こともありました。」</p> <p>○震災前新橋の芸者家の出入りしていたという車夫が今は一見して人殺しでもした<u>こと</u>のありそうな、相手と風体の悪い破落戸になって…</p> <p>○「鴨のおじさん<u>って</u>聞いた<u>こと</u>ある<u>だ</u>ろうおくん、わたしの<u>こと</u>だよ。」</p> <p>否定形は「ことがない」を基本として、「ことはない」「こともない」「ことのない」「ことない」等になる。</p> <p>○私は彼女の顔を、まだ一度も、まともに眺めた<u>ことが</u>なく…</p> <p>○イギリス人から移民に関する意見をきいた<u>ことが</u>なかったかわりに、移民どうしや、外国人の反応は面白いものでした。</p> <p>○朝、学校へ行く時、かさを持っていこうか、持っていくまいかと、空を見上げて考えた<u>ことは</u>ありませんか。</p>

	<p>○きみはこんな病気をわずらった<u>ことはあるまいが</u>、この問題を了解することはできるだけだろ う。</p> <p>○私は他人の蒙を啓こうと思って背伸びした<u>こともなければしゃがんだこともない</u>。</p> <p>○(塙信一は)入学当時から尋常四年の今日まで附添人の女中を片時も側から離れた 事のない評判の意気地なし。</p> <p>○(イギリスで)町を散歩していて、玄関が無人のまま開放されている家なんて、<u>みたこと _ ありませんもの</u>。</p> <p>また、</p> <p>○自分はかためらった<u>ことがしばしばある</u>。</p> <p>○大学から帰る道で妻と行き会うながら、知らずに通り過ぎた<u>ことが二度あった</u>そうである。</p> <p>○「あれは今でも彼女の肌の前に飾ってあるが、モデルがある絵ほど美しかった<u>こと は、かつてなかったし、これからもない</u>。」</p> <p>のように間に修飾語句がはさまれたり、</p> <p>○食べた<u>ことも見たこともない</u>西洋料理のソースやドレッシングの類を、どうしてこしらえ たろうか。</p> <p>のように並立関係の際に重複する部分が省略されたりする場合も見られる。</p>
--	---

현대 일본어 사전에 기재되어 있는 사항들을 보면, 표제어가 「-ことがある」로 되어 있는 것은 전무하며, 「こと」의 하위 항목에 기술되어 있는 것이 대부분이다. 다만, 표현문형으로서 「-ことがある」가 제시되어 있는 사전이 소수 있으며 다양한 예문은 물론 접속 및 변형형을 제시하여 학습에 도움이 되도록 자세히 기술하고 있는 것이 특징이다.

다음으로 「-ことがある」에 관한 개별 연구에 관하여 살펴보기로 한다. 관련 연구로 우선 이케다 히데키(池田英喜)¹⁰⁾의 연구를 들 수 있다. 이것은 구도 마유미(工藤真由美)¹¹⁾의 연구 결과를 토대로 「-ことがある」에 대한 재검토를 통해 「-シタコトガアル」는 화

4) 일본어 웹 사전 : <https://www.weblio.jp/content/%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%8C%E3%81%82%E3%82%8B>(검색일2019.09.29.)

5) Japan Knowledge : <https://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=2001006677400>(검색일2019.09.29.)

6) 沖森卓也他(2010) 『ベネッセ表現読解国語辞典』, ベネッセコーポレーション, p.446.

7) 日本国語大辞典第二版編集委員会(2001) 『日本国語大辞典第二版第五巻』, 小学館, p.901.

8) グループ・ジャマシイ(1998) 『日本語文型辞典』, くろい出版, p.114.

9) 森田良行(1989) 『日本語表現文型』, アルク, pp.289-291.

10) 池田英喜(1996) 「経験をあらわす「シタコトガアル」について」 『待兼山論叢 30(日本学)』, 大阪大学大学院文学研究科, p.11-26.

자의 주관으로 과거 사실의 존재를 나타내며, 화자에게 있어 특별한 정보=비일상적인 사건의 존재를 기술하는 것으로 정의하고 있다. 또한 「X가-シタコガアル」는 과거의 비일상적 사건의 존재를 나타내는 형식으로, 「Xハ-シタコガアル」는 「Xハ」라는 경험자가 갖는 경험을 나타내는 형식으로 구별하여야 하며, 전자는 부정문으로는 불가능하나 후자는 미경험을 나타내는 문장으로 부정문이 가능하다고 서술하고 있다.

또한 「-ことがある」를 「코+가+存在詞」의 형식으로 파악하여 의미 용법을 고찰한 연구¹²⁾도 있는데, 그 대표적인 것이 도쿠나가 다쓰유키(徳永辰通)¹³⁾의 연구이다. 해당 논문에서는 「코+가+存在詞」를 「코モアッテ」 「Vルコガアル」 「Vルコガナイ」 「Vタコガアル」 「Vタコガナイ」 「Vルコハナイ」로 분류하고 기존의 각 형식이 나타내는 의미를 추상하여 정리하는 관점이 아니라 사태의 生起라는 측면에서 「Vルコガアル」의 의미 용법을 제시하였다. 즉, 「Vルコガアル」는 기존의 사태가 일회적인가 반복적인가 기준이 되어 우연적 발생과 부정기적 반복의 2가지 용법으로 정리하고 있다. 후지모리 히로코(藤森弘子)¹⁴⁾는 「코가アル」문의 형태적 특징을 「타코가アル」 계열, 「르코가アル」 계열, 「타코가나이」 계열, 「르코가나이」 계열로 분류하여 「타코가アル」 계열은 토픽제시의 기능을 가지고 있으며, 「타코가나이」 계열은 최상급, 강조비유의 의미가 부가되는 경우와 놀람이나 비난의 의미가 부가되는 경우가 있음을 밝혔다. 또한

11) 工藤真由美(1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」 『ことばの科学3』 むぎ書房

12) 高橋太郎(1994) 「ダブルテンスの観点からみた<スルコガアル>の種々相」 『立正大学文学部論叢』 第100号, 立正大学文学部, pp.137-159. 와 藤森弘子(2003) 「ことがある」 『形式名詞がこれで分かる』 ひつじ書房, pp.50-58. 등이 있다. 해당 연구에서는 「코+가+存在詞」를 다음과 같은 형식으로 분류하고 가가의 의미를 제시하였다.

	高橋(1994)	藤森(2003)
코모아ッテ	理由をあらわす	-
Vルコガアル	時々おこることをあらわす 可能性が実現することをあらわす	蓋然性
Vルコ가나이	ときどきおこることをうちけす 実現することをうちけす 実現の可能性をうちけす	不生起
V타코가アル	経験のあることをあらわす	経験
V타코가나이	経験のあることをうちけす	経験の否定
V르코가나이	必要のないことをあらわす	不必要

13) 徳永達通(2012) 「Vルコ가アルの意味・用法」 『岐阜聖徳学園大学国語国文学』 31, 岐阜聖徳学園大学国語国文学会, pp.137(1)-128(10).

14) 藤森弘子(2000) 「談話における「코가アル」の意味と用法」 『東京外国語大学留学生日本教育センター論集』 26, 東京外国語大学留学生日本語教育センター, pp.33-47.

「ルコガアル」 계열은 「よく」「しばしば」 등 빈도 부사와 함께 쓰이는 경우가 많으며
가능성의 빈도를 나타내고, 「ルコガナイ」 계열은 가능성의 전혀 없는 경우에 사용되며,
상대에 대해 「ルコガナイ」를 사용하게 되면 「필요가 없다」는 의미를 나타내는 동
시에 명령, 의외의 간접적 표현 의미를 나타낸다는 특징을 제시하였다.

이상 현대 일본어에 관한 기술을 살펴보았다. 「-ことがある」 표현은 사전류에서
는 비교적 간단히 설명되어 있으나, 실제 생활 장면에서는 다양한 의미 용법으로 나타
나고 있으며 형식적인 면에서도 다양한 바리에이션을 보이며 사용되고 있음을 확인 할
수 있다.

2.2. 經驗·回想·習慣을 나타내는 複合辭의 變遷 樣相

그렇다면 복합사 「-ことがある」는 어떠한 과정을 통해 현재의 모습으로 정착되었는가?

「-ことがある」의 대략적인 사용 시기를 가늠하기 위한 단서가 되는 것은 2.1에서 살
펴보았던 『日本国語大辞典』의 용례문이다. 1879년의 『開化のはなし』의 용례
문(1)이 이에 해당하며, 「-ことがある」가 19세기부터 사용되기 시작했음을 시사한다.

(1) 近日の御政事は、私共の青年間（わかいとき）には見た的（コト）も聞た的（コト）
も無い事（コト）ばかり [開化のはなし 初・二回]

그러나 본고에서 「-ことがある」 및 관련 형식의 초출과 변화 과정을 고찰하기 위
해 일본 고전 텍스트¹⁵⁾를 대상으로 복합사 「-ことがある」와 변형형을 중심으로 해당 형
식을 추출해 본 결과 이하의 <표2>와 같은 결과를 얻을 수 있었다.

15) [1] 竹取物語(9世紀末期頃) [2] 伊勢物語(平安中期) [3] 土左日記(935) [4] 大和物語(951頃) [5] 宇
津保物語(972?) [6] かげろふ日記(974) [7] 落窪物語(10世紀後半?) [8] 源氏物語(平安中期成立) [9]
枕草子(平安中期成立) [10] 紫式部日記(1010頃) [11] 和泉式部日記(1010頃) [12] 堤中納言物語(1055)
[13] 更級日記(1059頃) [14] 大鏡(1134?) [15] 今昔物語集(12世紀?) [16] 夜の寢覚(平安後期成立)
[17] 狭衣物語(1060?) [18] 栄花物語(1028?-1107?) [19] 住吉物語(1221頃) [20] 将門記(10世紀
半ば) [21] 浜松中納言物語(平安後期) [22] とりかへばや物語(平安後期) [23] 方丈記(1212) [24] 平家
物語(1220?) [25] 宇治拾遺物語(1221頃) [26] 保元物語(1318?) [27] 徒然草(1329以降) [28] 平治物語
(1446以降) [29] 曾我物語(14世紀前半) [30] 無名草子(1196~1202頃) [31] とはげかたり(1313?) [32] 十
訓抄(鎌倉中期) [33] 沙石集(鎌倉中期) [34] 太平記(1370頃) [35] 狂言集(中世) [36] 謡曲集(中世)
[37] 義経記(室町初期) [38] 室町物語(中世) [39] 松浦宮物語(室町初期) [40] 仮名草子(近世) [41] 浮
世草子(近世) [42] 井原西鶴集(近世) [43] 近松門左衛門集(近世) [44] 浄瑠璃集(近世) [45] 西山物語
(1768) [46] 雨月物語(1776) [47] 春雨物語(1808) [48] 黄表紙(近世) [49] 洒落本(近世) [50] 滑稽本
(近世) [51] 人情本(近世) [52] 東海道中膝栗毛(1810-1822) [53] 近世随想集(近世)

〈표2〉 본 조사의 고전 텍스트에서 추출된 복합사 「-ことがある 및 변형형」

作品	-(だ)たことがある	ーることがある	-(だ)たことがない	-ることがない
謡曲集		1		
狂言集	5	4	9	
好色敗毒散	1			
五十年忌歌念仏		1		
冥途の飛脚		1		
丹波与作待夜の こむろぶし		1		
長町女腹切	1			
曾根崎心中		1		
心中二枚絵草紙		1		
心中刃は 氷の朔日	1			
生玉心中	1	1		
心中天の綱島		1		
大経師昔暦		1		
平家女護島		1		
仮名手本忠臣蔵		2		1
好色一代女	1			
双蝶蝶曲輪日記	2	1	2	
妹背山婦女庭訓		2		
碁太平記白石噺	1			
洒落本	2			
滑稽本			2	
滑稽本		1		
人情本	7	4		
黄表紙	1			
東海道中膝栗毛	8	2	3	5

형태적으로 「-ことがある」 류가 출현하기 시작한 것은 이상의 표의 결과와 같다. 그러나 그 이전에도 유사한 형태로 「-ことがある」 를 의미하는 표현들을 본 조사에서 추출할 수 있었다. 용례문(2)-(4)가 이에 해당한다.

우선 용례문(2)는 713년부터 편찬이 시작되었던 『豊後国風土記』에서 추출된 것으로, 「ことあらず」의 형태로 「見たことがない」 의미로 사용되고 있다. 본 용례문에서는 조동사 「き」가 함께 사용되어 현재의 「-たことがない」의 의미와 동일하게 사용되고 있다.

(2)菟名手、見て異しと為ひ、歡喜びて云ひしく、「化生れる芋は、曾より見しことあらず。実に、至徳の盛、乾坤の瑞なり」といひき。 [豊後国風土記 285]

또한 용례문(3)은 1009년경에 성립된 『和泉式部日記』에서 추출된 용례로, 「こともあり」가 「お心の慰むこともあるでしょう。」의 의미로 사용되고 있어 「-こともある」를 나타내고 있음을 확인 할 수 있다.

(3)また、御文あり。ことばなどすこしまやかにて、宮「語らはばなくさむこともありやせむ言ふかひなくは思はざらなむ」 [和泉式部日記 20]

그리고 가마쿠라 중기의 일기문학인 『信生法師日記』에서도 이에 해당하는 용례문이 추출되었다. 용례문(4)의 「こともあり」는 「また都に思い置くこともあったのだが」의 의미로, 용례문(3)과 마찬가지로 「-こともある」에 해당한다고 할 수 있다.

(4)昔は、前途を夕の雲の隔つることを恨み、後会を暁の月に憂ふる人も多く、又思ひ置くこともありしを、旧遊零落してなかば泉に返り、己が様々になりければ、我も哀れにて、遠ざかる都の梢を顧みれば、百千万茎の薺に異ならず [信生法師日記 88]

이상과 같이 「-ことがある」 류의 표현은 해당 형식이 출현하기 전 「ことあらず」「こともあり」 등의 형태로 사용되었던 것으로 보인다. 해당 용례는 많지 않았지만 추출된 용례에 입각하여 추측해 보면 「-たことがない」는 713년경부터 사용되기 시작하였으며, 「き」→「た」, 「あらず」→「ない」의 문법적 변화를 거쳐 현재의 「-たことがない」로 정착되어 왔음을 알 수 있다.

또한 용례문(3)(4)과 같이 「-ことがある」의 변형형의 하나인 「-こともある」가 「ことあり」의 형태로 상당히 일찍부터 사용되고 있는 것을 확인할 수 있다. 이것은 조사 「も」가 조사 「が」보다 훨씬 빠른 시기에 변화·분화과정을 마쳤음을 뒷받침해주는 증거라 볼 수 있다. 즉, 조사 「も」는 조사 「が」보다 이른 시기에 다른 단어와의 결합이 시작되었으며, 이러한 과정을 통해 「-ことがある」 류의 다른 형식보다 「-こともある」가 역사적으로 가장 빠르게 복합사화 되었다고 볼 수 있는 것이다.

그렇다면 「-ことがある」 류는 언제부터 복합사로 사용되었는지 살펴보기로 한다.

본 조사의 결과에 따르면, 우선 「-(だ)たことがある」의 경우, 무로마치 시대에는 이미 복합사의 형태로 사용되고 있었음을 확인할 수 있었다. 용례문(5)와 같이 이미 「-た」형과 결합하여 『狂言集』에서 사용되고 있었으며, 이것으로 보아 「-(だ)たことがある」는 『日本国語大辞典』의 용례보다 이미 200년 전부터 사용되고 있었던 것으로 추측된다.

(5)大名 「汝はは猿の舞を見たことがあるか。

太郎 「ついに見たことがござらぬ。

[狂言集 鞆猿 99]

또한 교겐 자료에서는 「-(だ)たことがある」가 5용례, 「-(だ)たことがない」가 9용례 수집되었다. 복합사의 정의에 따르면 복합사란 단어와 단어가 결합되어 새로운 의미를 갖는 것으로, 용례문(6)과 용례문(7)은 「こと」「が」「ある/ない」가 결합하여 「-(だ)たことがある」「-(だ)たことがない」의 현재의 의미 용법과 다르지 않게 사용되고 있는 것이 확인된다. 따라서 이미 중세 후기부터 「-(だ)たことがある」「-(だ)たことがない」는 복합사로서 정착되어 사용되고 있었던 것이다.

(6)甲乙 「何ごとでや。

男 「某は恥づかしながら、生まれてからまだ生きものを切ったことがない。

[狂言集 二人大名 119]

또한 『狂言集』에서는 이외에도 용례문(7)과 용례문(8)과 같이 다양한 변형형도 다수 확인할 수 있다. 이것은 신분에 따라 문말 표현을 다르게 나타낸 것으로, 「-(だ)たことがある」가 신분에 상관없이 널리 사용되었던 표현임을 시사한다.

(7)太郎 「サアサア飲ましめ。(茶屋飲む)

茶屋 「さてさて結構な酒ぢゃ。このやうなうまい酒は、つひに飲うだことがおりない。

太郎 「頼うだ人じまんの諸白でおりやる。

[狂言集 木六駄 230]

(8)伯父 「何と云うて叱るぞ。

太郎 「『まづ第一、吝い、人使ひは悪しし、よそへは呼ばれて行けど、つひに内へという

では呼うだことがござらぬ。あおやうな吝い人は、どこぞでは仕落ちがあらう』などと
言うて叱ります。こなた、ちと御意見をなされて下さい。 [狂言集 素袍落 193]

다음으로 「-ることがある」와 「-ることがない」를 살펴보기로 한다. 본 조사에
서의 「-ることがある」의 초출은 『謡曲集』의 「道成寺」 작품에서 사용되고
있는 것으로 용례문(9)가 이에 해당된다. 중세 후기부터 「-ることがある」가 사
용되기 시작하였으며, 현대어 용법과 동일한 의미를 나타내고 있다.

(9)能力甲 「何とした何とした。

能力乙 「鐘がしたたか煮え入つてある。

能力乙 「落ちたばかりで煮え入るといふことがあるものか (鐘のそばへ行く) 。

[謡曲集 道成寺 294]

또한 용례문(10)과 같이 에도시대 중기의 「近松門左衛門」의 작품『冥途の
飛脚』에서도 「耳打ちしておくことがある」의 의미로 쓰이는 용례도 확인할 수 있었
다.

(10)女郎衆も禿どもも、忠兵衛がことにつき。ハル耳打つておくことがある。

[冥途の飛脚 128]

그러나, 추출된 용례문 중 「-ることがある」가 복합사로서 새로운 의미인 「빈
도를 나타내는 경우」의 의미가 아니라 용례문(11)과 같이 「こと」「が」「あ
る」의 각각의 의미로 사용되는 것도 다수 수집된 것으로 보아 「-ることがあ
る」가 복합사로서 정착되어 사용되었다기 보다는 당시 유사한 형식의 표현들
이 혼용되어 사용되었던 것으로 판단된다.

(11)詞 「イヤ酒はおきや、飲んできた。さて話すことがある。これのはつが一客、平野屋の
徳兵衛めが。身が落した印判拾ひ。二貫目の偽手形で騙らうとしたれども

[曾根崎心中 31]

마지막으로 「-ることがない」는 추출 용례는 많지 않았으나, 추출된 용례모두

용례문(12)와 같이 현재의 의미와 같이 사용되는 용례가 수집되어 이미 복합사로 정착되었던 것으로 추측된다.

(12)かの鮎めが、わづか三尺か四尺の井の内を。天にも地にもないやうに思うて。ふだん外を見ることがない。ところにかの井戸がへに、釣瓶についてあがります。

[仮名手本忠臣蔵 44]

3. 나가며

지금까지 經驗·回想·習慣의 의미를 나타내는 複合辭 「-ことがある」를 중심으로 그 변화 양상을 고찰하여 보았다. 본 조사를 통해 얻은 결과를 정리하면 다음과 같다.

첫째, 「-(だ)たことがある」는 무로마치 시대에는 이미 복합사의 형태로 사용되고 있었음을 확인할 수 있었다. 이미 「-た」형과 결합하여 『狂言集』에서 사용되고 있었으며, 이것으로 보아 「-(だ)たことがある」는 『日本国語大辞典』의 용례보다 이미 200년 전부터 사용되고 있었던 표현이었음을 시사한다.

둘째, 「-(だ)たことがない」는 중세 후기부터 현재의 의미 용법과 다르지 않게 사용되고 있는 것이 확인된다. 또한 추출 용례의 경우 신분에 따라 다양한 문말 표현으로 나타나고 있었는데, 이것은 신분에 상관없이 복합사로 정착되어 사용되고 있었던 것으로 생각할 수 있다.

셋째, 「-ることがある」는 중세 후기부터 사용되기 시작하였으나, 유사한 형식의 용례문이 다수 추출된 것을 볼 때 당시 유사한 형식의 표현들이 혼용되어 사용되었던 것으로 판단된다.

넷째, 「-ることがない」는 에도시대부터 복합사로 정착되어 사용되어 왔음을 확인할 수 있었다.

금후 본 조사를 토대로 그 범위를 넓혀 經驗·回想·習慣의 의미를 나타내는 複合辭 「-ものだ」「-にきまっていた」「-ことにしている」「-ようにしている」「-ことになっている」등을 중심으로 그 변화과정에 착목하여 유사 의미간의 복합사의 변천과 상관관계에 관하여 연구를 진행하고자 한다.

【참고문헌】

- 池田英喜(1996) 「経験をあらわす「シタコトガアル」について」 『待兼山論叢 30(日本学)』, 大阪大学大学院文学研究科, p.11-26.
- 沖森卓也他(2010) 『ベネッセ表現読解国語辞典』, ベネッセコーポレーション, p.446.
- 工藤真由美(1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」 『ことばの科学3』 むぎ書房
- グループ・ジャマシイ(1998) 『日本語文型辞典』, くろしい出版, p.114.
- 高橋太郎(1994) 「ダブルテンスの観点からみたくスルコトガアル」の種々相」 『立正大学文学部論叢』 第100号, 立正大学文学部, pp.137-159.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会(2001) 『日本国語大辞典第二版第五巻』, 小学館, p.901.
- 藤森弘子(2000) 「談話における「コトガアル」の意味と用法」 『東京外国語大学留学生日本教育センター論集』 26, 東京外国語大学留学生日本語教育センター, pp.33-47.
- 松木正恵(1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」 『早稲田大学日本語教育センター紀要』2, 早稲田大学日本語研究教育センター, p.27, pp.46-49.
- 森田良行(1989) 『日本語表現文型』, アルク, pp.289-291.

◆ 인터넷 인용

일본어 웹 사전 :

<https://www.weblio.jp/content/%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%8C%E3%81%82%E3%82%8B>
(검색일: 2019.09.29.)

Japan Knowledge : <https://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=2001006677400>(검색일:2019.09.29.)

논문 투고 일자 : 2019. 10. 13.
논문 심사 일자 : 2019. 11. 03.
게재 확정 일자 : 2019. 11. 06.

 <要旨>

複合辞の歴史の変遷に関する研究

安志英

本稿は、近代日本語法の一つである複合辞の初出とその変遷過程の究明の一環として、「経験・回想・習慣」を表す複合辞「一ことがある」とその変形形態の分析・考察を通じて、各時期における使用実態と歴史の変遷を明らかにしたものである。今回の調査で、「一(だ)たことがある」は、室町時代にすでに複合辞として使用されていたことが確認できた。たとえば、「一た」型と結合した用例が『狂言集』に存在しており、このことは『日本国語大辞典』の用例よりもすでに200年前から使用されていた表現であることがわかった。次に、「一(だ)たことがない」は、中世後期から現在の意味・用法と変わらずに使用されていることが確認された。また、抽出された用例は身分によってさまざまな文末表現を伴いつつ用いられていたことから、身分を問わず、複合辞として定着していたと考えられる。また、「一ることがある」は、中世後期から使用されはじめたが、類似形式の用例が多数抽出されたことから、当時、類似した形式の表現と混用されていたと判断される。最後に、「一ることがない」は、江戸時代から複合辞として定着して使用されていたことが確認できた。

A Study of the Historical Change of the Japanese Compound Particle

An, Ji-Young

In this paper, we investigate the origin of the compound particle “kotoga aru”, which is one of the modern Japanese grammar, and its transition process. It is analyzed and discussed from the historical point of view. In this study, we have confirmed that “ta kotoga aru” was already being used as a compound word in the Muromachi period. It was used in “Kyogenshu” in combination with the “ta” type as an expression that was used 200 years ago from the example in the “Japanese Dictionary”. It has also been confirmed that “ta kotoga nai” has been used since the late Middle Ages without a change in its current meaning and usage. Moreover, the extracted examples from the late Middle Age period displayed various sentence ending expressions depending on an individual’s social status. After the late Middle Age period, it was used as a compound word regardless of social status. “Ru kotoga aru” began to be used from the late medieval period but not always as a compound word. However, it was confirmed that “ru kotoga nai” was never used as a compound word since the Edo period.